

アジア・太平洋研究センター主催講演会

日 時：2013年6月26日（水）

場 所：名古屋キャンパス N棟3階 社会倫理研究所 会議室

テーマ：中国における台湾史研究の回顧と展望

報告者：王 鍵（中国社会科学院台湾史研究センター秘書長，研究員）



中国・社会科学院台湾史研究センター秘書長，研究員の王鍵氏をお招きし，中国における台湾史研究の回顧と展望についてご講演いただいた。

講演は，次の4つに焦点をあてて報告がなされた。

- 一，中国における台湾史研究の発展段階
- 二，中国における台湾史研究機構の現状
- 三，中国における台湾史に関する研究成果の現状
- 四，中国における台湾史研究に存在する問題と今後の趨勢

王鍵氏によれば，中国における台湾史研究の発展には3つの段階があり，1949年から1966年までが第一段階，文化大革命後の1976年から2000年までが第二段階，2001年から現在までを第三段階に位置づけることができるという。

第一段階は「解放台湾」のスローガンが政治的に掲げられたこともあって，中国では台湾を「解放」するための政治的な意味を持った研究が多くみられ，実証研究が弱かった。そのため兩岸間での学術交流もほとんどない状況にあったという。また台湾が中国の一部であるとの観点が一層強くうちだされていたこともあり，中国と台湾の歴史認識の共有化をはかるべく，第二次世界大戦までにオランダや日本によって「侵

略された」台湾の歴史に対する研究に焦点があてられていたと指摘する。

文化大革命後の第二段階では、中国側から「台湾同胞に告げる書」などが発表されたこともあり中国と台湾のあいだで少しずつ学術交流が始められるようになっていったという。たとえば、1980年代前半には、アメリカのシカゴで辛亥革命に関する国際シンポジウムが開催され、そこに中国と台湾の研究者が参加するなどして中台間の学術交流がスタートしたほか、1990年代初頭にはすでに中国と台湾の双方で兩岸の研究者が議論のテーブルに着く状況にまで学術交流が発展していたと指摘した。

第三段階に入ると、台湾に民進党政権が誕生したことにより台湾側での台湾史研究が急速に進んでいった。民進党政権のときには中国との政治的対立は厳しいものがあったが、台湾での台湾史研究の進展を追い風としながら、中台間の学術交流はさらに盛んになっていったという。

王鍵氏は、こうした中国における台湾史研究の歴史的趨勢を説明しながら、中国と台湾の学術交流が深まっていくにつれて、兩岸双方の研究機構が充実していった経緯や、それに伴って学術的研究成果が充実していった背景を説明した。

中国における台湾史研究の今後の問題として王鍵氏は、高度な日本語運用力を持った中国人研究者が不足している点を指摘した。王鍵氏によれば、台湾史の研究は日本統治時代の分析を避けて通ることは出来ず、日本統治時代の分析には日本語資料の読解が必要になるという。また中国で台湾史研究者のすそ野を広げていくためには、大陸とは切り離された20世紀以降の台湾史を高等教育の時点から教育していく必要があるとも指摘した。いずれの指摘も今後の中国における台湾史研究の趨勢を検討するうえで、大変示唆に富むものだった。

（文責：星野 昌裕）